



ミドリナ白書
midorina White Paper



ミドリナ白書シンポジウム

報告書

ミドリナ白書シンポジウム

開催日：2020年2月23日(日)

時間：10:00～17:15(開場・受付 9:30)

会場：株式会社フォレストコーポレーション

参加費：1,500円(昼食&カフェ代)

定員：100人(先着順)

当日のスケジュール

10:00～11:00 基調講演 若杉浩一氏

11:00～12:00 分科会テーマスピーチ

12:00～13:00 Lunch(ざんざ亭さんのケータリングランチ)

13:00～15:00 分科会に分かれてディスカッション

15:00～15:30 Tea Time(kurabeさんのおやつ)

15:30～17:00 各分科会発表

17:00～17:15 若杉さんによるフィードバック



ミドリナ白書

midorina White Paper

ミドリナ白書？

白書？ いろんな省庁が出す、あの年次レポートですか？
いえ、ちよつと違います。

白書は、おもに前年度の報告ですが、
ミドリナ白書は、「これからやること」を描こうとしています。

森とわたしたちのかかわり方はさまざまですね。
思っていることや願っていることは人それぞれ。
それにジャンルもたくさんあります。

そこでミドリナ委員会は、
これからミドリナ白書を作っていくにあたって

「快」心地よみ

を、基準にして考えを進めます。

人が森にいるとき、どんなことが心地よいのだろうか？

森の側からしてみたら、どんな接しられ方が心地よいんだろう？

お互いにとって「心地よい関係」はどんな形なんだろう？

人と森の心地よさに敏感になれること。

そんなわたしたちの、

「森感度」

をあげていくことが、

ミドリナ白書の目的のひとつでもあります。

そのような考えを根っこにおいて、

2016年に生まれた「伊那市50年の森林(もり)ビジョン」から、
50年後までの道すじを描いてみたい。

みんなで「人と森の心地よさ」について語り合い、共有し、
「そちらへ行ってみたい!」と思う、

「人と森の未来、その暮らし」を描いてみましょう!

ミドリナ白書シンポジウム

～人と森の未来、その「心地よい関係」を描こう！～



2020年2月23日（日）、「ミドリナ白書シンポジウム」が開催されました。会場は、地域材を用いた家づくりを続けて20年の伊那市（株）フォレストコーポレーションさんの新社屋。木や石などの自然素材がふんだんに用いられた素晴らしい会場で「人と森の未来、その暮らし」について参加者全員で語り合いました。

1. 基調講演



若杉 浩一 氏
プロダクトデザイナー
武蔵野美術大学教授
日本全国スギダラケ倶楽部代表

シンポジウムのオープニングを飾った基調講演のスピーカーは若杉浩一さんです。現在はプロダクトデザイナーとして、また武蔵野美術大学クリエイティブイノベーション学科教授として「地域、社会の経済を循環するためのデザイン、関係づくり、リレーションデザイン」をテーマに活躍されている若杉さん。さらに「日本全国スギダラケ倶楽部」を設立し、地域社会とデザインの未来を模索しながら実践、研究を行い、森などの地域資源を使って社会を美しくすることを様々な手法やアプローチで実現しています。

前半はご自身の紹介から。熊本県天草市に生まれた若杉さんは九州芸術工科大学を卒業後、株式会社内田洋行に入社。「デザインは、物を売るというかわらで人間の生活を豊かにするものだ」と考え「これで世の中を美しくするばい！」と20代は懸命に働きました。日本初の修正テープで35億円の売り上げを生み出し、世界のデザイン賞も受賞した若杉さんでしたが、風景は何も変わりません。これが「モヤモヤ」の始まり。とめどなく売り上げを求められる世界の中で、自身が地域の産業など大切なものを壊す「悪の手先」なのではないかとさえ感じるようになり、会社に不適合であるとして窓際（事務仕事）へ追いやられた時代もあったそう。その後、デザインの現場へ戻る中で、自身の田舎で邪魔者扱いされている「森」の存在に目を留め「もし社会のためにデザインがあるのだとすれば売り物だけではなく、こういうことに目をつけなければいけないのではないか」と考え始めます。



何もかもが便利で安心・安全という社会の中で、何かが置き忘れているという状況。林業をどうデザインするのか、地域がありそこにデザインが絡んでいくという構図を考えた中で生まれたのが「日本全国スギダラケ倶楽



部]です。現在、日本各地に支部があり、長野県にも3つの支部が存在。略称「スギダラ」が進めているのは「戦後の植林によって杉だらけになってしまった日本の山林をやっかいもの扱いせず、材木としての杉の魅力をきちんと評価し、杉をもっと積極的に使っていかうじゃないか!」という運動です。もちろん、ただダラダラと日本全国を杉だらけにするわけではありません。「クオリティの高い、愛情のこもった、杉ならではのモノたちを世の中に広く行き渡らせよう」というプロジェクトであり、産地や加工者、流通、デザイン、販売など杉を取り囲むシステムを結びつけることで、街や住まいを杉だらけにし、面白く、楽しく解決していくのです。栃木県鹿沼市ぶつつけ秋祭りでは、スギダラメンバーが「杉で作られた屋台」で杉を原料とした商品の紹介・販売も行なっています。

宮崎県日向市の木造駅舎のプロジェクトや、子育て施設、空港、図書館での杉の利用、杉を使った家具のプロジェクトに加え、「無印良品」を展開する株式会社良品計画と共創した学びの場「MUJI com 武蔵野美術大学市ヶ谷キャンパス」もスタートしました。若杉さんがかつて抱いた「モヤモヤ」は決して間違いではなく、想いのこもったデザイン、地域や社会に向けてのデザインこそが世の中を、人を動かしていくのだということに改めて気づかされます。

また、経済として「見える価値」が大切にされてきた一方で、文化や美意識、喜びなど大切なものが置き去りにされていくこと。そこから生まれた「モヤモヤ」の拡大。こうしたモヤモヤを可視化し、地域と行政、企業をつなぐデザインをする「TOO MUCH な愛の押し売り」こそ、これからの時代に求められるものだと言います。



「イノベーションは面白いことから始まる」「一人ひとりの思いの集積が未来。自分ごととして今と向き合うこと。何かに期待しても、誰かのせいにしても何も起こらない」と若杉さん。

「すべては小さな一歩から始まり、積み重なり、未来につながる」

「未来は、どうやら、自分の手の中にある」

そんな力強い言葉で講演は締めくくられました。

講演の冒頭で「伊那は熱い。僕は、真っ正直に生きて、世の中から変だと言われるような人を『変態』と呼んでいるのですが、そんな『変態』な人が次々と出てきて、なんだか心地いい。紛れても心地いい気がしています」と話してくれた若杉さん。信念を貫き、数々の実績を残してきた若杉さんの熱く、ユーモア溢れるトークに会場にいたすべての人々が惹きつけられ、笑いの絶えない基調講演となりました。

2. 分科会テーマスピーチ

「快＝心地よさ」を基準に「森感度」をあげていくことが、「ミドリナ白書シンポジウム」の目的のひとつ。そんな考えを根っこにおいて、2016年に生まれた「伊那市50年の森林（もり）ビジョン」から50年後までの道すじを描いてみたいと考えました。

今回、掲げられたテーマは以下の5つ。ここでは代表者のスピーチが行われ、参加者それぞれが自分の行きたい分科会を自由に選ぶかたちで午後のディスカッションに臨みました。



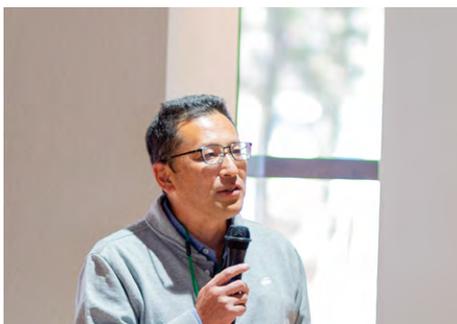
テーマ1 スピーカー
小林 成親 氏
NPO 山の遊び舎はらぺこ保育士

○テーマ1

森に学ぶ心地よさ！ —教育—

「自然との関わりを中心とした保育の中で子どもたちをのびのびと育みたい」と願う親と保育士が集まり2005年に立ちあげられた「山の遊び舎はらぺこ」。子どもたちは毎日、森や川、畑など様々な自然と関わりながら過ごしています。なぜ自然保育なのか。親も保育士も願いはただひとつ「子どもたちの“心”を育みたい」ということです。

今回、テーマに掲げられた「心地よさ」を「豊かさ」という言葉に読み解いて考えたとき、自然の豊かさと子どもの育ちの豊かさは重なり合っていると感じています。「自然や森との関わり方の豊かさについて」「50年先の学び舎がどうなっていくのか」「50年後に残したい大事なものはなんだろう」ということを分科会で皆さんと話していきたいと思います。



テーマ2 スピーカー
木平 英一 氏
株式会社ディーエルディー バイオエネルギー事業部
農学博士

○テーマ2

森を循環させる喜び！ —エネルギー—

電気、ガス、灯油、薪。様々なエネルギーがある中で、皆さんがなぜそれを使うのかといえば、理由はおそらく“そこにあるから”。そういう意味で薪は非常に使いづらいものであると考え、13年前に薪の宅配サービスを始めました。当時、ストーブといえば広葉樹を使うという考えが一般的でしたが、一方、山で間伐されるのは針葉樹。そのミスマッチを解消すべく、当社では針葉樹の薪を扱っています。会社をリタイアした方を中心に約100名の雇用を生み、さらに福祉施設や閑散期の農家の方にも仕事に携わってもらっています。

今回は「森とエネルギー」がテーマですが、それに留まらず福祉や雇用、また薪ストーブの利用者の面からでもエネルギーについて議論ができればと思います。



テーマ3 スピーカー
渡邊 竜朗 氏
kurabe CONTINENTAL DELICATESSEN
オーナーシェフ

○テーマ3

森の美味しさは快感！ 一食一

「おいしいもの」とは何かといえば口に入るもの。それをおいしくするという意味でいえば農業、飲食業、森で得られるものも同じであろうと考えます。我々は同業者であり、森と農家と料理人が手を取り合えば、地域を明るくしたりチャンスを広げていけるかもしれません。

おいしいものは家族をつなぎ、体や健康を作り、生活を満たすものです。また、地域を作り、豊かさをつなぎ、環境を作り、次世代にバトンをつなぐものでもあります。「おいしい」がキーになると、様々な課題は途端に自分ごとになります。なぜかといえば、まずいものは食べたくない、おいしいものを食べたいという気持ちは本能に訴えかけるものだからです。この後の分科会ではぜひ皆さんと「おいしい」の可能性を見つけていきたいと思います。



テーマ4 スピーカー
春日 嘉広 氏
長野県林業総合センター所長

○テーマ4

森を取り入れる暮らしの楽しさ 一住まい一

昨年10月、「オーストリア・フィンランド森林・林業技術交流推進調査」へ参加しました。強く印象を受けたことは多数ありましたが、両国とも林業、木材産業を主要産業のひとつとする中で、持続可能な林業が前提であることや、森林GISシステムがすべての基本にあり、誰でもネットでアクセスできる開かれたシステムになっていること、日本に比べて木がまっすぐなことに驚きました。様々な調査結果を参考に、今後も日本ならではの林業の強みを探っていきたいと思います。

今回「森を取り入れる暮らし」ということで、当センターで行なっている樹木の精油（芳香油、アロマオイル）もご紹介します。現在、試験研究を進めており、森を取り入れたひとつの暮らしの楽しさに繋がれたらと考えています。



テーマ5 スピーカー
清水 陽一 氏
鹿嶺高原キャンプ場マネージャー

○テーマ5

どんな森へ行きたい？ 一観光一

キャンプ場でマネージャーを務めながら、伊那の地域おこし協力隊として山岳観光も担当しています。伊那にきてちょうど3年目を迎えました。私が就任する以前の鹿嶺高原キャンプ場の宿泊者数は約900人ほどだったと聞いていますが、2年目でおおよそ4400人に増加しました。大きな理由としては「なっぷ」というキャンプ場のサイトに登録し、求める方にダイレクトに情報が伝わったことがあります。また、満足度を上げリピーターになってもらうことや、SNSで発信してもらうことも目標としています。

森の真ん中という恵まれた自然環境にある鹿嶺高原。焚き火をされる方も多いため、今後の試みとして、間伐の見学や薪割り、火熾し体験を行う「森林ツアー」なども企画してやっていきたいです。



Lunch Time

この日、希望者に提供されたのは伊那市長谷「ざんざ亭」さんのケータリングランチです。

鹿のソーセージとキノコのスープは、鹿の骨をひたすら煮込んだベースに、伊那市高遠「仙醸」の酒粕を加え、燻製した鹿のペーストを加えて煮込んだもの。ランチボックスには中川村「大島農園」の無農薬野菜がたっぷり盛り込まれ、カラマツオイルで森の香りをプラスした鹿肉100%のハムと、駒ヶ根市「自家製酵母のぱん 土ころ」のパンが添えられました。その下に敷かれたジャガイモのペーストには小麦の糠を使った「ぬかづけ」が刻んで混ぜ込まれており、チーズのような風味でパンとも野菜とも相性抜群。森の恵みを存分に堪能できる大満足のランチタイムとなりました。

3. 各分科会のディスカッション



場内5カ所にテーマ別の会場が設けられ、参加者はそれぞれに興味のある分野を選んでディスカッションに参加しました。各分科会とも話が盛り上がり、予定されていた時間はあっという間に終了。Tea Timeで「kurabe」さんのおやつ時間を挟み、「各分科会発表」にて話し合いの成果が発表されました。

テーマ1

森に学ぶ心地よさ！—教育—

ディスカッションレポート



分科会1では「森に学ぶ心地よさ」をテーマにディスカッションが行われました。参加者は20名。幼児教育に関わる方、農業、山や木と関わる仕事をしている方、伊那谷へ移住してきた方、学生の方など。ファシリテーターはミドリナ委員の平賀研也さんです。

自己紹介の後、前半45分間は50年後も守っていききたい「森に学ぶ」姿について、後半45分間はそのあるべき姿へ向けてこれからやることについて話し合うことになりました。

まず、スピーカーであるNPO山の遊び舎はらべこ保育士小林成親さんより「自然と関わり命と向き合い遊び込むことで、子どもの心が揺れます。これを積み重ね仲間や大人と共有する。その豊かさ、かけがえのなさを幼児期に血肉とすることこそ人が育つうえで必要」との話がありました。これに対し「森を通して自己肯定感を育めるような森づくりがしたい」と話したのは「やまとわ」社員であり、伊那西小学校で学びの森づくりにも関わる榎本さん。また、伊那百名山の会会長で地域の里山の昔の姿にも詳しい溝口さんからは「昔の子どもは山菜やキノコ採りが日常の遊びだった。今も機会さえ与えれば子どもはすぐ自然に親しむ」等の意見が出ます。



続いてファシリテーターの平賀さんが、参加者が事前に提出したメモを整理し、森での学びに必要なこととして「自然環境の保全」「木質あふれる空間が身近にあること」「学びの方法や機会の確立」「多様な教育の仕組みづくり」「学びを支えるコミュニティー」の4つが挙げられているものの、森に学ぶことの本質はこれで十分か、50年後も大切にしたい根本は、他にないのかと問題提起しました。その後の意見交換で出てきたのが「暮らしのなかに学ぶ」というテーマです。

そして議論は「暮らしのなかに学ぶ」ためには何が必要か、「私」は何をするかに移ります。出席者それぞれから以下のような意見が出されました。



「幼児期以降の小学校中学校高校、さらに青年期に至る学びの連続性がほしい」(自然観察指導員で里山づくりにも関わる大村さん)

「子どもを介して親もつながる学びの場であることが必要では」(ミドリナ委員の須永さん)

「子どもの学びには地域の人の関わりが大きい」(花フェスタに関わるほか保育園で花育をしている丸山さん)

「この地域から一旦出ても、また戻ってこられる雇用の場が必要」(伊那市高遠第二第三保育園園長の下島さん)

「馬耕を生業できたのは、とことん付き合える人が周りにいることが大きかった」(耕を中心に馬との暮らしを実践する横山さん)

「身近にいっぱいある資源を使えば山の中でも仕事はできます」(阿智村清内路に移住し、パン屋とキャンプ場を営む二川さん)

「長谷に中学校を残すため、田舎に根を張って生きる格好良さを発信したい」(伊那市長谷保育園園長の赤羽さん)

「農林業を生業としながら、子どもも参加できる創作の場所をつくりたい」(農業をしながら美術活動も行う小池さん)

「将来公務員になって今日の皆さんのような人たちの輪を支援したい」(信州大学農学部学生の小柳津さん)

「自然保育の現場と現状をたくさん見て学びたい」(信州豊南短期大学学生で学び保育士を目指す松島さん)

「子どもたちが遊び込める時間を保証する仕組みを考えたい」(私立保育園の保育士である伊藤さん)

「子どもも大人も遊べて、次の世代につなげられる森のふるさとづくりがしたい」(山を切り拓いてマウンテンバイクのコースをつくる赤羽さん)

スピーカーの小林さんは「私はこれからも右往左往しながら今の取り組みを続けるでしょう。一方、学校とは違う学びの場が日常的な部分で少しずつ増えてほしい。例えば親子であぜ道を歩いても子どもの心は揺れます。身近なところから始めてそれを誰かに言いたくなれば、段々仲間が集まってきます」と話しました。また、こうした意見が出る中で、最後にファシリテーターの平賀さんが、「皆さんがそれぞれのお立場で感じている森での学びについて愛おしくてしょうがないもの、かけがえのないものを、一人ひとりが言葉にしていくことが必要だと感じました」とまとめました。



○まとめ

・50年後、最も大切なこと

—森に学ぶことの根本とは「暮らしのなかに学ぶ」こと—

そのあるべき姿に向け、「私」がやることとして「学びの継続性(幼児以降小・中・高など)の確保」「長谷や高遠など山間地域の学校や保育園の維持」「子どもの学びを支える大人の営みの維持・確保」「学びの周りに多様な生業を持つ地域づくり」「開かれたコミュニティネットワークづくり」「使える森を後世に残すこと」「伊那らしい学びの実践・体験を発信し続けること」などが挙がりました。

●テーマ2

森を循環させる喜び！—エネルギー

ディスカッションレポート



分科会2では「森を循環させる喜び」をテーマに、株式会社ディーエルディーの木平英一さんを交えてディスカッションが行われました。ファシリテーターは、長野県森林政策企画幹の千代登さんです。参加者は全部で19名。元信州大学農学部演習林林長、教授を経て、KOA 森林塾を指導した島崎洋路先生を筆頭に、島崎先生の著書「山造り承ります」に影響を受けて森の世界に入り、森林整備事業を手がける特定非営利活動法人 森の座の代表・西村さん、建築会社に勤務する山口さん、KOA 森林塾に参加する有賀さん、薪ストーブのある暮らしに憧れ、ご主人は学校林整備に携わる野溝さんご夫妻など多様な顔ぶれが揃いました。

「木やエネルギー、バイオマスの良さをわかっている人が集まっているので、その前提をもって話を進めます」と千代さんが口火を切りました。2000年に東京から伊那市にIターンし、ご主人が森林業に従事する傍らご近所に薪の販売もしているという盛さんは「4人の子育て中ですが、給湯と暖を薪でまかなっています」と、まさに現役ユーザー。薪ストーブのある暮らしに憧れ、埼玉県から山梨県に移り住宅を構えたという増岡さんは「dldで薪ストーブを買いました。果樹、針葉樹、広葉樹と、いただける木を色々試しています」と試行錯誤を重ねています。

伊那市で木こりを養成する仕事をしている藤原さんもdldの薪ストーブ愛用者。「我が家の薪割りは妻の担当でしたが、怪我をきっかけに今は購入しています。歳をとると薪ストーブの管理が苦痛。普及が今一步進まないのは、その面倒部分ではないか。それから家の性能部分も大切で、気密性によって薪の消費量が違うのかなと思っています」と薪の良さはわかりながら管理していくことの難しさを訴えます。



「従来の日本は、住居の風通しが良く、火鉢やこたつなど当たる文化だった。50年後はどうなるのでしょうか？」と千代さん。「家はどんどん進化し、気密性に優れた家は増えています。薪ストーブは、少し小型になってきています」とdldの木平さん。今回のシンポジウムの会場、住宅メーカーである株式会社フォレストコーポレーションの社員・山岸さんは「当社のコンセプトは、廊下のない家。家族のコミュニケーション、団欒が少なくなっていることから、吹き抜けが中心にありその周りに部屋がある。暖を行き渡らせるために、中心に薪ストーブを置くという形式。50年後はわからないが、家族の形によって家の形式も変化していくでしょう」と、2人の話からも薪ストーブと家もライフスタイルの変化によって進化を遂げていることが伝わります。

「伊那市で薪ストーブが普及している背景には、dldさんの存在や里山の近さといったライフラインがあることも理由という意見もありましたが、いかがでしょうか」と千代さん。「薪燃料には広葉樹がいいと言われるが、実際、広葉樹と針葉樹の違いはほとんどない。伊那市周辺には針葉樹の間伐材が多いので、今は山の状況に合わせて針葉樹を使うことを推奨しています」と木平さん。伊那市長谷で里山整備の会社を営む西村さんは「里山整備も重要な

問題。間伐されていない広葉樹の山から薪を手に入れるのは大変。針葉樹の薪が広がれば、ユーザーを増やせるのではないかと話します。

「里山の所有者が次代に継承せず領域が曖昧、都会にいる息子が整備できないという問題もある。自分が住みますみでは、そういった区有林を有志が整備し、代わりに薪をもらうという Win-Win の関係ができています」と、ミドリナ委員であり木工職人の日下部さん。

森と人との分断、世代間の分断も、里山整備や木質バイオマスが広がらない要因ではないかと議論は展開されました。このような課題を解決し、バイオマスを利用するのはより良い未来を創っていくために必要だとする一方、「バイオマス発電のために木を切って燃やすというのは本末転倒」と、長野県内でおそらく最年長の林業技士資格を取得したばかりの寺沢さんは言います。



最後の議論。「バイオマスエネルギーを活用し、森を循環させていくためには、社会、コミュニティ、家族、男女のあり方も考えて行く必要があります」と千代さんは投げかけます。地元住民と広葉樹を種から育てる活動もしている酒井さんは「薪ストーブの公害について1000人を対象にしたアンケートで、Iターン者に対してクレームが出る人が多いという結果がありました」と話し、コミュニティを通じて正しい焚き方を知り、さらには薪の手に入れ方や割り方を学ぶことも大事という議論も展開。

太陽光発電やエネルギーの仕事に従事する女性の伊藤さんは「今日は、バイオマスなどに興味のあるピラミッドの上部の概念の人が集まっている。地域には、関わりたいけれど関わり方を模索している人もいますので、そういう人をどう繋げていくかも大切。また、エネルギーの話し合いの場では、男性ばかりがいることも多く、技術などの話に終始しがちなところもあるので、もっと女性の参加が必要だと思います」とし、千代さんが「森と人の分断、コミュニティの分断の中で、これからは女性の参加を促し、女性のそして社会の価値観を変えていく。バイオマスエネルギーにおいても女性がキーワードになっていくのではないかと話して議論は締めくくられました。

○まとめ

- ・バイオマスエネルギーの適切な活用が森を循環させていく
- ・広げていくには社会、コミュニティ、家族、男女のあり方まで考えることが必要
- ・すでに利用している人だけでなく関わり方を模索している人たちをどう繋いでいくか
- ・キーワードは「女性」



森を循環させるためにはバイオマスエネルギーのバランスの良い利用が必要です。里山の手入れが適切に行われ、間伐材が無駄なく使われると同時に地域経済に貢献できることが理想であり、そのためには様々な課題を解決しなければなりません。今後バイオマスエネルギーの利用を広げていくにあたっては「興味はあるけれどまだ関わっていない人」をどう巻き込み、どうサポートしていくのが鍵になりそうです。また、家庭に薪ストーブを導入すれば必然的に女性が関わらざるを得ない一方で、エネルギーの話し合いなどの場では女性が参加しづらいという問題点も提起され、バイオマスエネルギーにおいても今後は「女性」がキーワードになっていくのではないかとこの場で話し合いを終えました。

●テーマ3

森の美味しさは快感!一食一

ディスカッションレポート



分科会3では「森の美味しさは快感!」をテーマにディスカッションが行われました。参加者は、スピーカーでもあるkurabe CONTINENTAL DELICATESSEN オーナーシェフ渡邊竜朗さんを含む11名。伊那で農業に携わっている方や地域おこし協力隊として地域の課題に取り組んでいる方、都会で暮らす方、移住した方、Uターンして改めて地域の魅力を感じている方など様々な参加者が集まり語り合うことができました。

すべての人にとって身近な「食」というテーマ。しかし「森」と「おいしい」を結びつけることは意外と難しいことでもあります。「森とおいしいをイコールでつなぐには抵抗感もありますし、イメージが限定されてしまう可能性が高い。今日の分科会の中で最も難解なテーマかもしれませんね」と渡邊さん。しかし「山岳観光に携わる方や農家でおいしい作物作りを目指す方とお話していると、目指すベクトルはみんな同じ方向にある。その頂点に『おいしい』があるとすれば、そこに今日の鍵があり、可能性があると考えています」と語り、まずはイメージを限定せず「森とおいしいがつながる場所」について自由に意見を交わし合うことになりました。

最初に多く出されたのは「外で食べるごはんはおいしい」という意見です。「登山のとき山頂で食べるごはんは格別においしい」「外で食べるとコンビニのおにぎりさえいつもよりおいしくなる」「遠足で食べたお弁当の美味しさや、その時に採って食べたアケビの味が忘れられない」など、空気や景色、土や葉っぱの香りなど「環境と結びついた美味しさ」をそれぞれが記憶として鮮明に抱えていることがわかりました。



また、自然の恵みが当たり前にあることの幸福。昨年の1月に愛知県から伊那へ移り住んだという竹松さんは「山菜がスーパーに並んでいたりと、友だちが採ってきておすそ分けをしてくれたり。森で採ったおいしいものを普通に調理して食べられるのはすごいこと」と話します。また、高遠・杖突峠近くの山地を切り拓き、農業を営んでいる林さんは「養蚕が盛んだったころの名残で自生した桑の木があり、実がつく時季になると、いつもは朝のんびりしている子どもたちが早朝から外に出て顔中ベタベタにして帰ってくる」と可愛らしいエピソードも披露。渡邊さんからはフランス料理の巨匠・ジョエルロブション氏の代表料理で世界的にも有名な「サーモンのオゼイユ風」の“オゼイユ”が日本ではどこにでも生えているスイバ（雑草）であるという笑い話や、「都内ではシェフが摘んできた野草や花をお皿に美しく盛り付けて提供しているお店もある」という料理人ならではのエピソードが語られました。

また「大芝高原のコテージに宿泊した際、水道から出た水がとびっきりおいしくて驚いた。何杯も飲んで、一緒に来た人といまだに『あの時の水はおいしかったな』と思いつく話をする」と話してくれたのは、神奈川県在住で両親の住む伊那市へたびたび足を運んでいるという唐木さん。

山草や山菜、キノコ、桑の実、そして水。当たり前で暮らしていると気づくことのできないこうした「自然からのギフト」に、森とおいしいをつなぐヒントが隠されているのかもしれない。

加えて多く聞かれたのは「体験」から得られるおいしさです。キノコ採りや山菜採りへ行き、「それを料理して食べた時のおいしさに感動した」という意見が出されたほか、岐阜出身で現在「やまとわ」で木工の仕事に携わっている近藤さんからは「小さなころから毎年春に土筆を採り、甘辛く煮て“土筆ごはん”にするのが家族の恒例行事でした」というエピソードも。「土筆はそれだけ食べておいしいものではないけれど、家族で“はかま”を処理した思い出や食卓に並んだシーンが今も目に浮かぶ」と話し、体験の記憶や思い出もおいしさの大切な要素の一つになっていることがわかりました。



その後、「我々が感じていない中で享受しているポテンシャルをいくつ出せるかがこの先の未来に繋がっていく。これまで出たもの意見でも良いので、出してもらうと集約していけたら」という渡邊さんの声を受けて出されたのは「水がおいしい」「野菜がおいしい」「鮮度が良い」「みんなで食べている」「手作り」「旬のもの、季節のものが食べられる」「自分で収穫してきたもの」「作る人が真面目」「土がいい」「気候、寒暖の差が食物をおいしくする」「採ること、食べることが喜びにつながる」「様々な地とアクセスがよく文化がミックスされている」などのキーワード。

また、木があり、薪を作る環境があることから「野外で火を使って料理ができることも強みのひとつでは」という声も挙がり、焚き火で作る料理のおいしさに加えて、火を囲むことそのものが楽しい時間や寛ぎの時間、その中心にあるおいしさを生み出していると話が展開しました。

『「ないを探す」のではなく『あるを探す』ことをしていけば様々な魅力が出てきます。アルプスをふたつ持っている環境は日本でここにしかないですし、この地にしかないものが絶対にあるはずですよ」と渡邊さん。

渡邊さんのリードのもと話題が広がり、和やかな雰囲気の中で終わった今回のディスカッション。時間内に結論に達することはありませんでしたが、意識し、話しあうことで森や地域の魅力を再認識し、おいしいから生まれる「可能性の芽」を感じられる時間となりました。

○まとめ

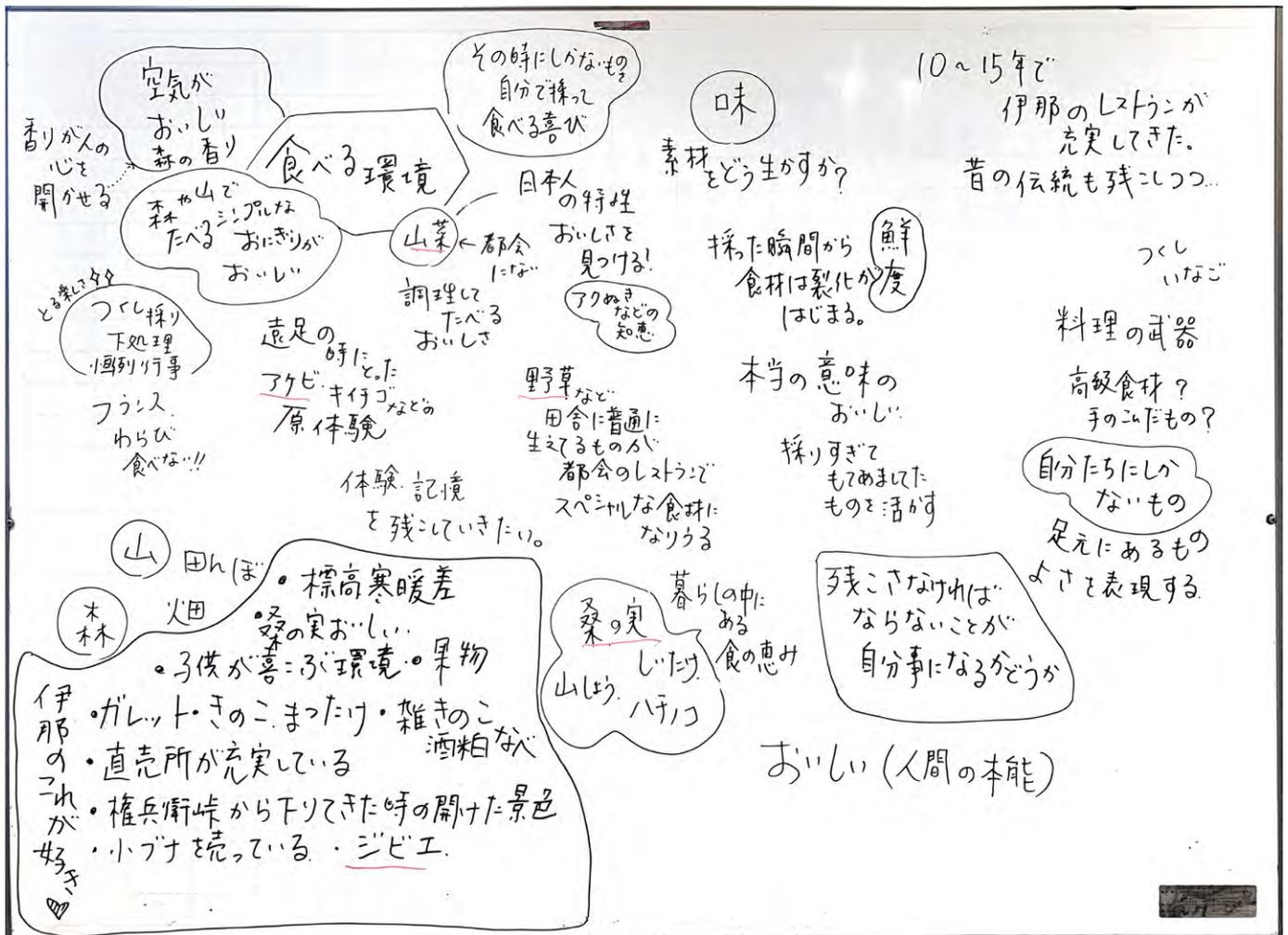
・森でのおいしさには3つの要素が存在する。

感覚的なおいしさ、記憶に残る心情的なおいしさ、物理的に森があることで広がるおいしさ

- ・それらのおいしさをどのように「場」とつなげていくのが今後の課題
- ・おいしさの輪郭を見つけること
- ・伊那谷の森ならではの固有度を高めていくこと



身近なことがらでありながら、意外と難しい「森」と「おいしい」の関係。しかし、自由に語り合う中で「おいしさの3つの要素」が浮かび上がってきました。今後は、このおいしさをどのように「場」とつなげていくかが課題です。そのために必要なのは、おいしさの輪郭をはっきりさせていくこと、この地にしかない固有の魅力を見つけて高めていくこと。もしかすると、様々なテーマの底に「おいしい」が潜り込んだり、「森と農業」や「森と他の職種」が掛け合わさっていくことで、解決の糸口が見つかるかもしれません。そうしたことを意識しながらさらに探求し、結論の場を作っていきたいということで今回のディスカッションは終了しました。



- | | |
|-----------|---------------|
| 水がおいしい | 寒暖の差 |
| 野菜がおいしい | 楽しみながら |
| 鮮度 | 喜んでもらうために採る |
| みんなで食べる | 火が使える(薪) |
| 手作り | 火をおこせる環境(薪) |
| 旬のもの | 手間のかかることを楽しむ心 |
| 自分で収穫したもの | ロケーション |
| 作る人が真面目 | ミックスされた文化 |
| 土がいい | 移住者の夕さ |

テーマ3 森のおいしさは快感!一食一分科会のホワイトボード

●テーマ 4

森を取り入れる暮らしの楽しさー住まいー

ディスカッションレポート



分科会4には、16名が参加しました。参加者には、樹木の伐採や木材の製材などの林業を営む方、大工、木工家など木に携わる仕事をされる方が多く集まったほか、生活の中で木を愛する方、伊那谷に惹かれて他県から移住した方もいらっしゃいました。共通していたのは「地元の森や木材を、もっと身近に取り入れた暮らしを実現したい」という思いを抱いていることです。

まずは、ひとりずつの自己紹介と共に、それぞれの立場からの見解が述べられました。大工を営む今枝さん、林業に従事する盛さん、高島さんからは「もっと地元の木材を使ってもらいたいのに、道が整備されていなかったり、急傾斜のために奥山に入れず伐採ができない」「注文が少量であれば伐採しても採算が合わない」という意見が出され、結果、奥山に手が入らず荒れてしまっていることについて問題提起がされました。安価で手の出しやすい、外国産の木材流通が活発である現状につながっています。

一方で、ミドリナメンバーの唐澤さんは「もっと暮らしの中で地元の木材を使いたい」と話しました。他のメンバーからも「公共施設を地元の木材で建ててほしい」「薪ストーブを取り入れてほしい」「地元の木材で家を建てたい」「DIYでも使用できればいいのに」「生活に身近なコンビニなどで使われる紙コップレベルでも使用されればいいのに」という希望がありました。

地元の木材を届けたい思い、使いたい思いもあるにもかかわらず、実現させるには費用も手間もかかるという課題が浮き彫りになり、「地元の木材を、あたり前に使うことができる仕組みを構築するべきではないか」とまとめられました。その仕組みは、地域の中でお金のサイクルを生じさせるメリットにも繋がるのです。



費用も手間もかかるから地元の木材が選ばれない。そんな現状を打開する助けとなるのが「家や施設を建築する施主さんなのではないか」という意見も挙がります。そして共有されたのは「費用や手間がかかっても、地元の木材や、先祖が守ってきた山の木材を用いて家を建てられることは、最高の贅沢である」という価値観。「PRをして広めていくべきではないか」と自営業を営む浜田さんから意見が出されました。誰の山で、誰に伐採されたのかなど、植樹から加工までのストーリーを公開して、施主さんに地元の木材に愛着を持ってもらい、選んでもらう夢が語られました。そのためには「クレームにつながりやすい木材の節や割れは味であることも、同時に知ってもらうべきではないか」との見解も出されました。

それから「伊那谷を木に携わる仕事で食べていける環境に整えたい、木の仕事に携わろうとする人を歓迎する地域にしたい」と建築会社に勤める栗崎さんが語りました。これを受けて「職業訓練として農林業を学ぶことや、起業へとつながる投資や支援が行われることが大切ではないか」そして多様な働き方が認められていくなかで「副業でも木材に携わることができればいいのかもしれない」との意見もあがりました。伊那谷の未来につなげるため、「子どもの頃から木や森に触れる教育を充実させることも大切だ」との話にもつながりました。



また、ミドリナ委員の須永さんからは「里山に自由に入れて、マウンテンバイクや森林浴などのレジャーを日常的に楽しめる生活を送ることが理想だ」とも語られました。そこで、里山に自由に入れるように、また、近くに住めるように制度化すると同時に、里山に入ること自体をレジャーとしてとらえてもらえるような価値を提供したい、との話になりました。たとえば、里山の近くにコテージのような建物を新設して、近隣の空き家や農地も、同じくレンタルできるように整備することで、コミュニティ（クラインガルテン）をつくり、里山やそれに伴う農林業を、身近に味わえる機会を設ける未来です。

里山を身近に感じられる生活をつくりあげることで、自然の豊さを感じられると同時に、移住や関係人口の増加も導けるのではないかと、この話にもなりました。

○まとめ

私たちが描く理想の未来

- ・あたりまえに地域の木が使われる未来
- ・伊那谷に来れば、木の仕事ができる未来
- ・もっと里山に近い暮らしができる未来



消費者、大工、木工家にとって、地元の木材が簡単に手に入る仕組みを整え、公共施設や工場、家の建築にはもちろん、家具やDIYにも地元の木材を取り入れられる未来。現在でも、ガードレールやアロマオイルでは地域の木材が使われていますが、今後叶えたいことは、コンビニやスーパーで使われる紙コップレベルにも採用されることです。地元の木材の使用は地域の中でお金が回る経済の仕組みにもつながります。もっと先の100年後には、より近隣で伐採された木材しか使われないことが理想です。また、木の仕事に従事したい方が、木の仕事で食べていけるように、職業訓練、投資などによる起業支援を通じて、後押しする未来を描きます。大人たちはもちろん、子どもたちへの農林業の学びの場を提供することも未来への投資です。さらに、里山がもっと身近になる未来も描きます。空き家やコテージ、農地の賃貸制度を取り入れることで、里山を身近に感じて生活ができるコミュニティ（クラインガルテン）をつくりあげます。森に入ること自体がレジャーになることも理想のひとつです。

木苗きたい未来

① あたりまえに地域の木が使われる未来

(100年後には近隣の木しか使われぬ未来)

・コンビニ・スーパーで使われるレベルで"地域の木を使う"

○公共の建物・工場も木を使う。まきストアも。

○家はもちろん

○地元の木が簡単に手に入る ← PR. 消費者
家・大工
木匠も

○カドレール・プロム etc

トータルリテイク
GIS



② 伊那谷に来たら木の仕事ができる未来・木に関わる

た(さ)の
副業がある

○職業訓練・起業支援 投資 衣食住 農林業 とともに 起業あり

○教育 (子どもの頃から木・森に触れる教育)

③ 里山に近い暮らしができる未来

・クラインガルテンの集積場 → コミュニティ

・空家の活用

・森に入るのがシブイ

テーマ4 森を取り入れる暮らしの楽しさー住まいー 分科会のホワイトボード

●テーマ5

どんな森へ行きたい？—観光—

ディスカッションレポート



分科会5では「50年後の伊那の森の観光」についてディスカッションを行いました。参加したメンバーは、スピーカーである鹿嶺高原キャンプ場マネージャー・清水陽一さんを含む13名で、うち伊那市出身者は約半数。伊那市や市外での観光業に携わる方、プライベートで森に親しんでいる方など、様々な立場の参加者が集まり語り合うことができました。

印象的だったことは、自己紹介の段階から、分科会参加者の共通認識が炙り出されたことです。観光という「外の人に向けて魅力をどう伝えていくか」ということに焦点が当たりがちですが、「地元の人に伊那の森や山の奥深さをもっと知ってほしい」「自分たちで伊那の森の魅力を語れるようになりたい」といった意見が多く出ました。まずは伊那に住む自分たちが森の価値を理解し、親しむ。この、住んでいる人たちが満足していることを「ローカルティ」と定義して、話を進めていくことになりました。

そのほかに出てきたキーワードが、「ポテンシャル」と「双方向の交流」です。ポテンシャルとは、伊那の森を観光という視点で捉えたときに、活かされていない、もったいないと感じられる資源のこと。伊那市内の自転車専門店「CLAMP」自転車部部長を担う竹内さん、伊那市山岳高原観光課の高野さんともに「MTBで遊べるフィールドについては、まだ活用できてないところが多い」と語っていました。また、そういったアクティビティをしない人でも、より身近に森に親しめるような場や施設があると良いといった意見も出ています。

「双方向の交流」とは、森から得た楽しみや学びを、私たちから市外の人々へ共有する。または年配者から下の世代へ、下の世代から年配者へ。こうした、楽しみと学びの交流が活発に行われることで、魅力的な観光が形づくられていくのでは、という話に展開しました。



そして「描くべき未来」とは、の議論に移ります。参加者のなかで「いったい伊那の森は(私たちにとって)どういうところが魅力的なのか、また残していくべきなのか」という点を挙げていったところ、「朝陽が当たる中央アルプス、夕陽が当たる南アルプスは素晴らしい」「権兵衛峠側から見た街と南アルプスの絶景はすごい」など、雄大なアルプスの風景の魅力について盛り上がりました。また途中でミドリナ代表の柘植伊佐夫さんが合流し、伊那を離れたからこそ気づけた、森の恩恵を受けた水と農作物の美味しさを語っていました。こういった意見出しをするなかで、「伊那にはなにもない」のではなく、豊かな森が「あり」、そこに自分たち自身も価値を感じている、ということが見えてきたわけです。必要以上に手が入っていない森が豊富に「ある」ことを活かした観光。これを50年後の描くべき未来に据え、それに向かっていくためには、今なにをすべきか。

そこで出たのが、まずはより多くの伊那市民の声を集める場を設けて、市



民にとっての「ローカリティ」「ポテンシャル」を洗い出すところから始めよう、という結論でした。そして声を集めて共有していくなかで、私たちが表現したい「伊那の森」の輪郭を作り、キャッチコピーを付けるなど、その輪郭を見える形にデザインしていく。また訪れた観光客への情報伝達的手段としてIoTを活用したり、ローカリティがぶれない範囲で収益を上げる方法を考えたりしていく必要がある、という意見も出たところでディスカッションを終えました。

○まとめ

- ・ローカリティ（市民が満足していること）で人を呼ぶ
- ・豊かな森が「ある」ことを活かした観光
- ・市民一人ひとりが感じる「ローカリティ」「ポテンシャル」を集積



浮き上がってきた課題は「まずは住んでいる自分たちが森との距離を縮める必要がある」ということ。また参加者のほとんどが、手つかずの豊かな森、その森から受けられる恩恵が「ある」ことに魅力を感じている、ということもわかりました。その「ある」ことを観光に活かすために、改めて、伊那市民が森に感じている「ローカリティ」「ポテンシャル」をリサーチして洗い出し、共有すること。そして、観光客とコミュニケーションを図るためのデザインを作っていく必要があるだろう、という結論に至りました。

4. 若杉さんによるフィードバック



プログラムのラストを飾ったのは若杉浩一さんによるフィードバックです。「(ディスカッションでは) みなさん、楽しそうに、目をキラキラさせながら自分のことを語り、未来のことを語り合っていて本当にいいなと思いました」と若杉さん。こうしたディスカッションこそまさに若杉さんがイメージしていた「学び」の形であり「どういうタイミングでどういう人たちとできるかということ。この連続が、おそらくこの地域の新しい価値を見出していくのだろう」と感じたそうです。また、森や山、川については「あえてひっくり返した言い方をすれば、そこに価値があるわけではない。でも、それを価値だと感じる人たちの力が『価値』になり、磨き上げ、語りあった末に、それがとても大切に愛しいものだと気がつくのです」と話しました。

各分科会の発表について感想が述べられたあと、総論として若杉さんは「僕が本当に大切だと思っている学び。武蔵野美術大学や無印良品でやりたいたと思っていた学びの源泉がここに実はありました」と改めて語ります。そして「今日、熱心に話し合った様々なことがらや出てきたものを磨き、伝えなければいけません。できれば今後は子どもたちもいたほうが面白いし、連続していった方がいい。もし連続させて何かやるのであれば僕たちも学生を連れて来たいですね」とうれいお言葉も。「これが未来に伝える大切なイノベーションのような気がします。来られて嬉しかったですし、よかったなと思いました」と笑顔で語っていただきました。

最後には「伊那にしかない大切な学び、大切なこと、大切にしていくこと、伝えたいこと、伝えなければいけないこと。それがまさにいま出はじめているところなのでぜひ続けていただきたい。今日のみなさんの真剣な姿が、子どもたちの未来につながることを確信しました」と熱く、力強いメッセージもいただき、会場からは大きな拍手が巻き起こりました。





ミドリナ白書企画・運営
(敬称略・順不同)

ミドリナ委員

柘植 伊佐夫
平賀 裕子
竹松 幸麿
唐澤 幸恵
齋藤 しのぶ
浜田 久美子
小林 健吾
千代 登
平賀 研也
日下部 良也
須永 次郎
須永 理葉
長谷部 晃
西村 智幸
福田 溪樹

伊那市

浦野 真由美
柿木 淳一
伊藤 満
三宅 慎平
内山 輝美

協力

山岸 徹
栗崎 彩子
金丸 國男
渋谷 未知
株式会社フォレストコーポレーション

